

山内一豊・千代と豊臣秀吉

市立長浜城歴史博物館 太田浩司

秀吉家臣としての出世

山内一豊が、秀吉に仕えた明確な時期は分らない。天正元年（一五七二）八月、織田信長軍の越前朝倉義景軍への追撃戦である刀根坂の合戦で、一豊は顔に矢傷を受けながらも奮戦し、敵將・三段崎勘右衛門を討ち取ったという逸話が山内家に伝わる。この討ち取った首は、まず秀吉の許に持ち込まれ、首実檢がなされたというから、一豊はこの時には秀吉の家臣であったと考えられる。ただし、この一豊の功名は、元亀元年（一五七〇）四月の信長による越前金ヶ崎城攻めの時の逸話ともされ、この説をとれば、両者の関係はもっと早くから確認できることになる。

この一連の近江・越前侵攻の戦功を賞して、天正元年（一五七二）、秀吉は一豊に近江国浅井郡唐田村（現在の虎姫町唐田）で四百石を宛行っている。秀吉から与えられた初めての封地であった。この時期、たとえば浅野長政が伊香郡葛寺村（現在の高月町葛寺）に百二十石の地を与えられたように、秀吉家臣たちは、主君の西面となった北近江三郡（伊香・浅井・坂田）の中で領地を与えられている。その意味では、一豊は秀吉家臣として



▲豊臣秀吉像（国友助太夫家文庫）

て順調な出世を遂げている。

その後、秀吉は信長から毛利氏攻めを命じられ、中国地方を転戦することになる。その中で三木城攻め・鳥取城攻め・備中高松城攻めなど、主な合戦には一豊は秀吉部隊の一員として参加していることが知られる。また、秀吉の天下統一への端緒となった、山崎の合戦・賤ヶ岳の合戦にも参加しているが、取立てた武功は知られていない。天正十一年（一五八四）に展開した小牧・長久手の合戦でも、森川屋敷（現在の愛知県春日井市内）の城番や羽黒城（現在の愛知県大田市内）の修築を行ったことが知られるのみである。

北近江三万石を与えられた天正十三年閏八月二十一日付けの宛行についても、秀吉からの文書でその旨が伝えられている。また、天正十八年九月二十日付けで行われた、遠江国掛川城主としての転封も、秀吉朱印状をもってなされている。田中吉政をはじめとする秀吉宿老たちは、秀吉から派遣されたという側面が強く、秀次との絆は希薄だったようだ。それは、秀次事件によって一層明確になる。

秀次事件とその後

文禄二年（一五九三）八月、秀吉に秀頼が誕生すると、秀次は排斥の憂き目にあう。文禄四年（一五九五）七月に至り、秀次は謀反の嫌疑で秀吉から断罪され、高野山で切腹する。しかし、秀次付の宿老で、この事件に連座したのは、遠江国横須賀城主の渡瀬繁詮のみであった。かえって、山内一豊は八千石の



▲顔に矢傷を受けながらも一豊が奮戦した刀根坂

加増を受けている。秀次亡き後、一豊は秀吉の直臣となり、その忠実な家臣としての姿は、それ以降も変わらなかった。

ただ、文禄二年一月十七日、一豊は勘気を受け、朝鮮出兵を命じられたといい、同年一月の伏見城の普請で、一豊が担当した工場の工事が遅れ、秀吉が立腹したという話が伝わっている。こうした状況のなか、一豊の心は次第に家康に近づいていったのも事実かも知れない。関ヶ原合戦では、徳川家康の東軍に従い、その軍功により土佐国九万八千石（後に二十万石）の大名となった。しかし、彼の大名としての出世の大半は、秀吉への忠誠によって保証されたものであった。

妻・千代をめぐる逸話と実話

この一豊を妻として支えたのが、千代である。ただ、戦前の女性の常として、この一豊夫人も謎に包まれている。そもそも、千代と千代とどうかも、確実な史料で証明できない。その院号である「見性院」と記すのが、最も正確な表記である。その出自も、近江国坂田郡飯村（現在の米原市飯）の若宮喜助友興の娘とされるが、最近になって美濃国郡上八幡城主・遠藤盛数の娘であったとする説が喧伝されるようになった。いずれの説も、江戸時代に作成された系図が根拠で確証を欠く上、近江も美濃も山内家には非常に縁深い地であり、何とも判断に窮する。ただ、山内家の系図・家伝類は、すべて近江若宮氏説で統

共感 共生 下座

ビューティ・ソシアル
 たちはな
 17-18 Minato-cho
 Nishiku, Tokyo 100-8211
 PHONE 03-6463-1211
 02-5787
 プライム・ザ
 たちはな
 84-1 Utsunomiya-cho
 Nishiku, Tokyo 100-8211
 PHONE 03-6463-7325
 クレールバーン
 たちはな
 1-10-10 Nishiku, Tokyo 100-8211
 PHONE 03-6463-8666

豊臣秀次家臣となる

秀吉と一豊の関係を考える上で、天正十三年（一五八五）は大きな画期となる。この年の閏八月、一豊は近江長浜の三万石の城主となるが、秀吉の甥で近江八幡城主であった豊臣秀次の宿老としての入城であった。秀次は近江国で四十三万石の所領を得たが、その内二十万石は自身の直轄領、残りの十三万石については、秀吉から付属させられた宿老の領地であった。その宿老としては、豊の他に、筆頭格の田中吉政の他、近江国水口城主の中村一氏、近江国佐和山城主の堀尾吉晴、美濃国大垣城主の柳直末がいた。

彼らが近江八幡城主の豊臣秀次の家臣であったことは、天正十八年（一五九〇）の小田原北条氏の攻撃など軍事編成に表れる。しかし、この八幡時代の一豊に対する重要な指令は、秀次からではなく、すべて秀吉自身から発せられている。そもそも、長浜城主として

されており、そちらを尊重するのが、良識ある判断と私は考える。

この一豊夫人をめぐるエピソードが、いくつか知られる。最も有名なのは、一豊が名馬を購入するために、親から預かった十両を鏡箱から取り出した逸話である。戦前の国語の教科書に掲載されたこの話は、「賢婦の鑑」として「山内一豊の妻」を署名にした。その他、関ヶ原合戦の際に、西軍の歩兵を最も早く徳川家康に知らせた「笠の緒の密書」の話が伝わっている。また、時代は前後するが、長浜在任の時代に、千代は唐織の端切を集めて縫い合わせて小袖を作った。今のパッチワークだが、その出来栄えは人々を驚かした。周囲の人の薦めで一豊はそれを秀吉にみせた。秀吉も感心し聚楽第の人々にも見せたが、やがて禁裏へも上納されたという話が、山内家に伝わっている。これも、秀吉と一豊の深い繋がりを示す話と考えられる。

また、一豊没後、周囲の反対を振り切って土佐国から京都へ赴き、晩年を都で過ごした。この地での生活は、同じく京都に住いた秀吉の正室・北政所との親交を保つためであったと言われている。大坂の陣を前にして、世は徳川の時代と決まった訳ではなく、どの大名も大坂の豊臣家と接点は保っていた。山内家や夫人にとって、秀吉が起こした豊臣家の存在は、あまりにも大きかった。これも、秀吉と一豊との密な主従関係が背景にある。

古戦場のちよつと新しい歩き方

「ねえ、姉川、行かへん？ 行こつ、姉川探検！」

編集長の言葉に、思わず「いいですよ」と手をあげたものの、おいおい、ちよつと待った！ 姉川ってどこ？ 何があった場所……、というわけで、すこおし退屈かもしれませんが、まずは予習にお付き合ってくださいな。

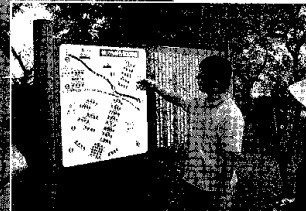
姉川とは、岐阜県境から南流して伊吹山西

へ転じ、東浅井郡びわ町で琵琶湖に注ぐ川。ただし、ここでいうのは姉川合戦があった場所のことで、地理的には姉川の中流域、長浜市と浅井町の境界にある野村橋付近（浅井町三田・野村付近）を指す。元亀元年（一五七〇）、ここで、織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍との間で戦いが行われた。当初は浅井軍の善戦で織田軍が追い詰められるが、徳川

へ転じ、東浅井郡びわ町で琵琶湖に注ぐ川。ただし、ここでいうのは姉川合戦があった場所のことで、地理的には姉川の中流域、長浜市と浅井町の境界にある野村橋付近（浅井町三田・野村付近）を指す。元亀元年（一五七〇）、ここで、織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍との間で戦いが行われた。当初は浅井軍の善戦で織田軍が追い詰められるが、徳川

▲「功名が辻」のなかで、一豊が馬から落ちたとされるのは○のあたりか……

▲「姉川戦死者之碑」①のそばの布陣図をみて解説する太田隊長



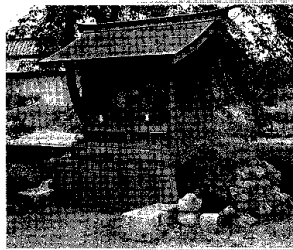
一豊落馬の場所は？

隊長は、中世史の超仕事人こと、長浜城歴史博物館の太田学芸員。しつこい残暑もなんのその、知的好奇心が満たされるならめげるものか！ と最初に向かった先は旧野村橋。橋の北側には、「姉川戦死者之碑」と書かれた大きな石碑と合戦の通説が描かれた合戦配陣図。案内板には、「この姉川をはさんで北に陣取る浅井、朝倉連合軍は約一万八千人、かたや南に織田、徳川連合軍も二万八千人でした」と記される。

川を見ながら、総数四万六千人の戦いを頭に描いていると、「今の風景と四百年前のそれとはかなり違いますよ」と、太田隊長。当時の姉川は、川床が現在よりも高い天井川で、今のように川を見下ろす地形ではなかったようだ。となれば、気にかかるのは、小説「功名が辻」の姉川シーン。

『伊右衛門は河へとびこんだ。が、馬が前脚を折ったのか、どつと河中へ投げだされた。……槍をさがしたがそのあたりに見つからない。馬もない……』

いったいどの辺りで、馬を失くした一豊がオロオロしていたんだろう？ フイクシヨ



▲三田の集落の西端にある七士の墓。②



▲徳川軍の本陣があった勝山④。中央に見える高い木の先は、当時、飛び交う矢が当たって枯れたと伝わっている。



▲信長が陣を張ったとされる場所。「陣杭の柳」と呼ばれる。⑤



▲田んぼのなかに建つ遠藤直経の墓③。誰か花を手向ける人のいて……



▲直経の墓から姉川方向を見る。



虎御前山

小谷城跡

七士の墓

血原千人斬りの岡

野村橋

旧野村橋

姉川古戦場証の碑

姉川戦死者の碑

勝山

陣杭の柳